基礎･臨床の両面からみた耐性菌の現状と対策

耐性菌シリーズの連載にあたって

まつもと　てつや
松本哲哉
Tetsuya MATSUMOTO

最近話題の新型インフルエンザに代表されるように、いわゆる新興・再興感染症はこれまで何度もアウトブレイクを起こしてはわれわれを不安に陥れてきた。しかし私達が日常の臨床の場で遭遇し、治療に難渋している感染症は、このような突発的な感染症ではなくさまざまな耐性菌による感染症である。これまでは次々に新しい抗菌薬が開発され、たとえ“いたちごっこ”ではあっても耐性菌に対する切り札をわれわれは持ち続けてきた。しかし現在は多くの製薬会社が抗菌薬の開発から撤退しており、手持ちの札も心細くなってきている。このような現状を考えると、私達は現在利用できる抗菌薬をいかに効率よく使って耐性菌感染症を乗り越えるか、また耐性菌を増やさないためには何ができるのか、などといった対策を真剣に考えるべき時が来ていると思われる。

耐性菌への対策は、単に抗菌薬の適正使用だけに限られるわけではない。敵を良く知るためには、その細菌そのものの特徴やなぜそのような耐性菌が出現するのか、といった基礎的な内容も無視することはできない。また各施設や地域によって耐性菌の分離状況も異なることから、サーベイランスを行って自らの施設の状況を知ることも大切である。さらに日々の診療においては、手指消毒を含めた標準予防策などの徹底も重要である。治療面においては、現時点でその耐性菌にどの抗菌薬が使用可能で、どのような投与法が望ましいのか、といった点も大切なポイントとなる。すなわちどれか1つの対策を行えば耐性菌はクリアできる、といった魔法のような手段はなく、われわれは地道に知識を得て、日々の改善に努め、さらに一定のレベルに達した後も油断することなく、その状況を維持できるよう努力しなければならない。

本シリーズは現在、臨床の場で問題となっている、あるいはこれから問題となるであろう耐性菌にフォーカスを当て、専門家の先生方からUp-to-dateの内容を含めて解説していただく予定である。本シリーズが耐性菌に関わっておられる臨床検査技師、薬剤師、看護師、および医師の方々の検査および診療の一助となれば幸いである。

東京医科大学 微生物学講座 主任教授
〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1

Department of Microbiology, Tokyo Medical University
(6-1-1 Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo)